

レジナチェリ、レタレ、アレルヤ

主任司祭 吉池 好高

さわやかな新緑の中、聖母月を迎えています。レジナチェリ、レタレ、アレルヤ。天の元后、喜びたまえ。アレルヤ。復活節の喜びを聖母とともに讃えて、教会は、朝に昼に晩にこのように歌います。

それにしても、十字架の下で愛するわが子の苦しみを悲嘆のうちに看取った聖母を支え続けたものは何であったのでしょうか。どのような状況に陥ろうとも、わが子の傍らを離れることなく、見守り続けるのが母というものです。できるなら、自分のいのちに代えてでも、わが子の無事を願うのが母の心だからです。すべての母親たちの悲しい性を負った聖母を支えるためには、しかし、それを超えるものが必要だったに違いありません。この人の世の残酷さは、これ以上にはない母の強さをも、悲嘆のどん底で圧殺してしまうのです。わが子の十字架の下に立つ聖母の、わたしたちには気丈すぎるとも思えるそのお姿は、悲しみの果ての悲しみそのもののお姿です。その悲しみの底で、聖母を支え続けたものは、信仰以外には考えられません。聖母において信仰とは、「わたしは主のはしためです。御ことば通りのこの身になりますように」との決意に生きること他なりません。そのような聖母の信仰に応えて、神はご自分のはしためである聖母を御子の十字架のもとへと導かれたのです。それは、ご自分のはしための信頼を試みるためのことであつたのでしょうか。誰も、弟子たちさえも一人として耐ええなかつた試練の中で、聖母は御子の十字架のもとから離れることはなかつたのです。御子の十字架のもとに立つ聖母は、御子が語り聞かせてくださったその御ことばを御子が語っておられた通りに信じたのです。御子の十字架のもとに立つ聖母は、目に見えていることを超えて、御子の復活の栄光を心のうちに見ておられるのです。そして、十字架から降ろされた御子のお体を膝の上に抱き取られた聖母は、そのままのお姿で、復活の栄光の光のうちに、十字架の御子のお姿をわたしたちに示しておられるのです。そのような聖母に向かつて、聖母とともに、わたしたちはアレルヤの歌をささげるのです。